

「資質・能力の育成に向けた授業づくり②」— 思考力、判断力、表現力等の指導と評価を軸に② —

# 資質・能力の育成に向けた 教育課程の編成と実施 — 実現可能な取組に向けて —

## I 学習指導要領の趣旨の 実現状況

大塚（司会） 五月の座談会に続き、九月号は「資質・能力の育成に向けた教育課程の編成と実施—実現可能な取組に向けて—」と題して行います。現在の学習指導要領の趣旨の実現状況についてどのように認識されていますか。

佐野 ここ一、二年で現行の学習指導要領の趣旨を生かした研究が着々と増えてきていると感じています。具体的にお話しすると、札幌市では「令和5年度札幌市学校教育の重点」の中で、学習指導要領が示す主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に向けて、自ら疑問や課題をもち主体的に解決する学習として

「課題探究的な学習」を位置付け、札幌市の課題探究的な学習の推進計画方針を策定し推進しています。個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」から札幌市内の各校の実践を見ていると、単元間や他教科等とのつながりを重層的に捉える授業づくりが増えてきていると感じます。

総則の中には、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の中に、「各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が鍛えられる」と書かれていますが、私自身はここが一番ポイントだと捉えています。各教科等の「単元や題材の内容や時間のまとまりを見通し」と示されているので、一時間の中で主体的な

出席者



安藤浩太

東京都昭島市立光華小学校主任教諭



段松淑子

高知県宿毛市立宿毛小学校長



佐野浩志

札幌市立山鼻小学校長

学びや、対話的な学びなどというものが完結するわけではなく、単元のまとまりを見通すような各校の実践が増えてきていると実感しています。そのような単元のまとまりごとの実践、教材化に焦点を当てて実践を深めてきているのではないかと思います。

単元を見通した上で、単元間、教科等間もつなぐような問題解決的な学習をどの学年でも先生方みんなが意識して、学校全体として取り組んでいる学校が増えてきていますし、非常に有効な手立てではないかと思っています。

**段松** 高知県でも、学習指導要領が全面实施される前から、資質・能力ベースの授業づくりに向けた取組を進めてきました。資質・能力を基にした授業づくりと見方・考え方を働かせることについて、教師の中でも随分議論されてきています。そして、資質・能力ベースの授業づくりを進めるために、県が冊子を作ったり、いつでもどこでも誰でも学べる場として「授業づくり講座」を開設し、拠点校を中心に授業改善を進めたりする取組をしています。

本校では、全国学力・学習状況調査や県の学力状況調査を実施後、すぐに全教職員で自校採点を行います。そして、問

題の趣旨や出題の意図を確認しながら、誤答を指導事項と関連付けながら分析し、どのような指導が誤答につながったのか、指導をどう変えていけばよいのかを全員で考えるようにしています。それにより、客観的に学校の課題を把握した上で、見方・考え方を働かせながら考えている子供たちの姿はどのようなものかということも検討を重ねています。また、単元の構想を立てる際には、分析結果も考慮しながら、この単元を通してどのような力を付けたいのか、その力が次はどこにつながついていくのか、学習指導要領や解説を基に学年で構想を練り、授業の中で子供たちと計画を立てるようにしています。また、キャリア教育も大事にしていますので、この学びはどこにつながりどんな意味があるのか、また、どの教科とつながっていくのかも常に考え、子供たちに問い返ししながら、取組を進めているところです。ただ、資質・能力が実際に単元の中でしっかり育成できたかについては、まだ十分でないのが現状で、そこが課題となっています。

単元のまとまりや一時間の中で子供たちが主体的に動けているか、友達と知恵を合わせながらできているか、深い学びになったのか、「分かった!」とすとん

司会者



大塚健太郎

文部科学省教科調査官



岡本亜希子

横浜市立東汲小学校主幹教諭

と落ちた学びになっているのか、そのようなことが、本校の課題です。

**安藤** どちらかというと私の周りでは、資質・能力というより、主体的な学びとは何か、対話的な学びとは何か、深い学びとはどのような子供の姿で、どのような指導が求められるのか、学習指導要領改訂に伴い授業レベルで議論されてきました。

座談会

資質・能力の育成に向けた授業づくり2 一思考力、判断力、表現力等の指導と評価を軸に②—  
資質・能力の育成に向けた教育課程の編成と実施—実現可能な取組に向けて—

子供たちの身の回りの問題を題材とした算数指導の実際

# 子供たちの身の回りの問題を

# 解決する算数授業

〈全国学力・学習状況調査の問題を例に〉

笠井健一

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官  
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

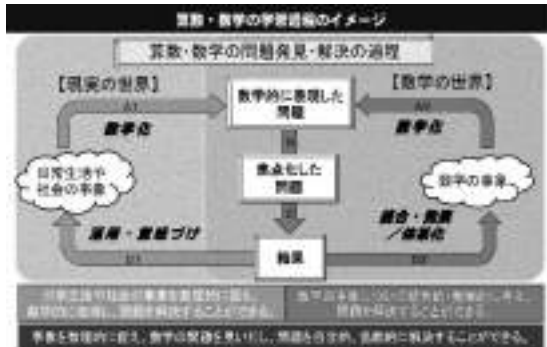
### 1 算数・数学の問題発見・解決の過程

資質・能力が育成されるためには、学習過程の果たす役割が極めて重要である。算数科・数学科においては、中央教育審議会答申（平成二八年一二月）に示された「事象を数理的に捉え、数学の問題を見いだし、問題を自立的、協働的に解決し、解決過程を振り返って概念を形成したり体系化したりする過程」といった算数・数学の問題発見・解決の過程が重要である（図1）。

子供の問題発見や問題解決の学習過程

においては「日常の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決したり、解決の過程や結果を振り返って考えたりする」とことと、「算数の学習場面から問題を見いだし解決したり、解決の過程や結果を振り返って統合的・発展的に考えたりする」ことの二つの過程が相互に関わり合っており、このような問題発見・解決の過程で学習することができるといえることが大切である。さらに、これらの基盤として、各場面で言語活動を充実し、それぞれの過程や結果を振り返り、評価・改善することができるようにすることも大切である。

図1 算数・数学の問題発見・解決の過程



※各場面で、資料は適宜活用し、図1の過程は、自立的に、対外的に行い、それぞれに主体的に取り組むようにする。また、それぞれの過程を振り返り、評価・改善することができるようになる。

表1 調査問題の枠組み

算数科の内容(領域)	数と計算 図形 測定 変化と関係 データの活用
主たる評価の観点	知識・技能 思考・判断・表現
算数・数学の問題発見・解決の過程における局面	日常生活の事象
	数学の事象
	日常生活の事象を数理的に捉え、問題を見いだすこと
	数学の事象から問題を見いだすこと
	問題解決に向けて、問題を焦点化すること
	焦点化した問題を数学的に解決し、数学的な表現を用いて筋道を立てて説明すること
	解決過程や結果を振り返り、意味づけたり、活用したりすること
	解決過程や結果を振り返り、概念を形成したり、統合的・発展的に考えたりすること

現行の学習指導要領においては、この過程を基に数学的活動を規定している。数学的活動とは、事象を数理的に捉えて、算数の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決する過程を遂行することである。数学的活動においては、単に問題を解決することのみならず、問題解決の過程や結果を振り返って、得られた結果を捉え直したり、統合的・発展的に考え直したりして、統合的・発展的に考察を進めていくことが大切である。この活動の様々な局面で、数学的な見方・考え方が働き、その過程を通して数学的に考える資質・能力の育成を図ることができる。

一方、全国学力・学習状況調査における小学校算数科の問題では、この算数・数学の問題発見・解決の過程を様々な局面で捉え、調査問題作成の基本理念に沿って、学習指導要領の考え方を考慮し、「算数科の内容(領域)」「主たる評価の観点」「算数・数学の問題発見・解決の過程における局面」の三つの視点で、調査問題の枠組みを表のように整理し、問題の作成に当たっている(表1)。

ここで、図1における算数・数学の問題発見・解決の過程は、小・中・高等学校全体を踏まえた図になっているが、表1に示した局面は、特に小学校算数科に特化したものになっていることに注意が必要である。

本稿では、これらに示した二つの過程のうち、「日常の事象を数理的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決したり、解決の過程や結果を振り返って考えたりする」過程を重視した算数の授業について、令和三年度の全国学力・学習状況調査の算数の大問三の問題を基に述べる。

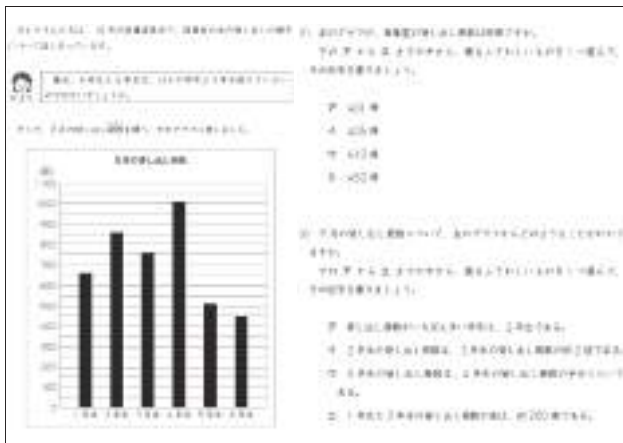
## 2 全国学力・学習状況調査の問題より

ある小学校の図書委員会では、「図書

室の本をもっと借りてもらいたい」という願いをもっている。どうしたら増えるのかを考える前に、まずは実態を調べようということになった。このとき、問題中に登場するひよりさんは「最近、五年生と六年生は、ほかの学年より本を借りていないのではないだろうか」という漠然とした思いをもっている。

そこで「九月の貸し出し冊数」を調べ、棒グラフに表している(資料1)。

資料1 9月の貸し出し冊数に関する棒グラフと設問



# クラウドの活用：動画コンテンツの活用法

文部科学省初等中等教育局GIGA StuDX推進チーム

関連動画はこちらから



## はじめに

本号では、授業における「動画コンテンツの活用」について紹介する。

また、次ページでは、特設ウェブサイト「StuDX Style」の事例の中から、「動画コンテンツの視聴」について掲載する。

## 情報収集として視聴する

インターネット上には授業の様々な場面で活用できる動画コンテンツが豊富にある。ここでは、子供がこれらの動画を課題設定に向けた情報収集として視聴し、授業に臨む実践を紹介する。小学校学

習指導要領（平成二九年告示）の総則には、「家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮すること」とあることから、そういった観点から本実践を紹介したい。

教師は、新しい単元・題材が始まる前や授業の前日までに、クラウド上で動画のURLやワークシート等を子供に共有する（写真1）。子供は事前に動画を視聴し、クラウド上にあるワークシート等に、気付いたことを入力する（写真2）。ワークシート等は、クラウド上で共有されているので、教師はその内容をいつでも確認できると共に、子供は友達が入力した内容を参照しながら取り組むことが可能である。このように、授業内容に応じ

て、事前に一人一台端末で動画を視聴しておくことで、考えたことを話し合ったりまとめたりする時間を増やすことができる（写真3）。また、子供自身で、動画を必要ところで止めたり、繰り返し視聴したりすることができ、個別の課題や興味・関心に応じて学習を進められるメリットがある。

## おわりに

事前に動画を視聴する際は、情報をどのように整理するかが重要になる。そのため、視聴しながらキーワードを挙げたり、途中で静止して視聴した箇所までを整理して文章にしたりする「視聴の方法」を指導する必要がある。普段の授業から、単元や本時の目標に応じて、動画等の資料から必要な情報を収集する方法についての指導が重要である。



写真1 動画のURLやワークシート等を共有している様子



写真2 動画を視聴し、ワークシートに入力している様子



写真3 家庭で動画を視聴している様子

## 教師と子供がつながる

# 動画コンテンツの視聴

■校種・学年：小学校以上

【ポイント】学習支援ソフト等で動画の URL やワークシート等を共有！

### ■活用の概要：

インターネット上には授業の様々な場面で活用できる動画コンテンツ（例えば「NHK for School」など）がある。中には、ワークシート等がセットで掲載されているものもあり、指導計画を立てる際の参考にすることができる。



児童生徒は1人1台端末を活用することで、動画を必要ところで止めたり、繰り返し視聴したりすることができ、個別の課題や興味・関心に応じて学習を進められる。動画コンテンツを授業の事前課題として視聴したり、家庭学習で授業の予習や復習として視聴したりすることも可能である。

■準備するもの：動画の URL、ワークシート等

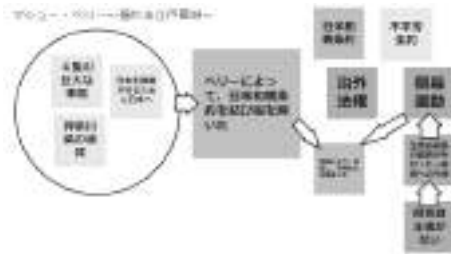
事前に動画を視聴し、クラウド上のワークシート等に気付いたことを入力



視聴した内容を基に授業で話し合う



復習等のために視聴する



児童生徒は家庭で動画を視聴し、クラウド上にあるワークシート等に、気付いたことを入力する。ワークシートは、クラウド上で共有されているので、教師だけでなく児童生徒もその内容をいつでも確認することができる。また、児童生徒は友達が入力した内容を参照しながら取り組むことも可能である。

動画の URL やワークシート、授業に関する情報等を共有しておくことで、教師が説明する時間を短縮でき、児童生徒が考えをまとめたり、表現したりする活動を充実させることができる。

予習や復習として、家庭学習で動画を活用すると、児童生徒の学習進度や理解度、興味・関心に応じて視聴することができる。

## アドバイザーからのコメント

クラウド上で URL を共有しておくことで、児童生徒はいつでも動画を見ることができます。事前に動画を視聴してから授業に臨むことで、考えたことを話し合ったりまとめたりする時間を増やすことができます。その際、視聴しながらキーワードを挙げたり、途中で止めて要点をまとめたりする等、動画を視聴する方法についての指導も重要です。

※[https://www.mext.go.jp/content/20230717-mxt\\_kyoiku01-000030970.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230717-mxt_kyoiku01-000030970.pdf)より転載

### 【StuDX Styleについて】

文部科学省では、1人1台端末の活用に関する情報を特設ウェブサイト「StuDX Style」にて発信しています。「GIGA」に「慣れる」「つながる」活用事例を多数掲載しておりますので、研修会等で紹介いただくなど、ぜひ御活用ください。



本記事は、出典を記載の上、研修等で転載・配布していただけます。

# 幼児教育

## 論説

■特集…言葉に対する感覚や言葉で表現する力を育む

# 物や人との関わりが 深まる中で育つ言葉

近年、幼児教育と小学校教育の接続においては、少なくとも五歳児から小学校一年生の二年間を「架け橋期」と位置付け、幼保小（幼児教育を行う施設である幼稚園・保育所・認定こども園と小学校）の協働により、その時期の教育を一層充実させていくことが重要とされている（注一）。小学校以降の教育においては、幼児教育において以上に、言語的・文字的なコミュニケーションに重点が置かれるようになる。すなわち、経験したことや考えたことについて、話し言葉や書き言葉で伝え合うことが基本となり、言葉を思考の道具として用いることを通

して、様々な教科等での見方・考え方を働かせて学ぶことが求められるようになっていく。その意味で、幼保小の滑らかな接続という点においても、幼児教育において言葉に対する感覚や、言葉で表現する力を育んでいく重要性は一層高い。言葉は一種の道具であり、物や人との関わりの中で子供のものとなり、使いこなされるようになっていく。同時に言葉は行為や出来事に意味を付与し、人を動かすものにもなり得る。本稿では、言葉に対する感覚や言葉による表現が豊かになっていく上で、物や人との関わりや環境にどのような意味があるのか、そして

言葉の育ちが認識や協同性の育ちと連動することによどのような意味があるのか、園での保育場面でよく見られるやり取りを手掛かりとしながら論じていく。

### 1 やり取りの中で結び付く 経験と言葉

言葉は、思考の道具となっていく以前に、まずはコミュニケーションの道具である。子供は、大人たちが言葉を使うさまを見て育ち、同じように使ってみようとする中で学んでいく。例えば、物を手渡すやり取りにおいて、「ちようだい」「どうぞ」「ありがとう」といった言葉が



福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳  
学園大学連合教職開発研究科教授

岸野麻衣

添えられる中で、行為と言葉が結び付いていく。コミュニケーションそのものの方法や意味を感じ取りながら、その道具として言葉を獲得していくのである。

そうしたやり取りの中では、まだ言葉にならない子供の思いや考えに意味付けがなされ、言語化されていく。例えば、ケーキの玩具をお皿に乗せて手を合わせ、手を叩こうとする一歳児に、保育者（注二）は「お誕生日おめでとう、かな？」という言葉とともに「ハッピーバースデー」の歌を添える。子供は喜んでリズムに合わせて手を叩き、歌を真似て口ずさむ。保育者は、子供が玩具を前にどんなイメージをもち、何をしようとしているのか、何を考えているのかを汲み取り、それに合わせた言葉を探っていく。そうすることで、まだ言葉になりにくく、なかなか子供の思いや考えが言語化され、子供の言葉をつくっていく。

言葉の育ちは認識の育ちとも連動していく。ある園で参観していると、黄色い紙の貼られた小さなプラスチックカップをもった一歳児が「ジュース、どうぞ」とやってきた。保育者とのやり取りを横目に、「レモンジュース？」と意味を添えると、「すっぱい？」と尋ねられた。大人とのやり取りの中で、「すっぱい」

などと反応を得たことがあったのだらう。果たしてこの子供は「すっぱい」に実際に出会ったことはあっただろうか。経験より先に言葉に出会っていたかもしれない。しかしこうした言葉の真似事をしてみるのが、いざれ実際に経験したときに結び付き、認識されていく。

現実世界での人とのやり取りに加えて、歌や絵本といった文化的な営みに触れることもまた言葉と認識を育てていく。トンボを見て「ハチだ」という二歳児は、『とんぼのめがね』や『ぶんぶんぶん』といった歌を通して、飛んでいる虫の名前や特徴を分かっている。歌や絵本を通して言葉に触れ、それが遊びや生活での経験と結び付くことで認識につながっていくのである。

## 2 思いや考えの表現から協同と探究へ

イメージを喚起する環境は言葉を生み出すことにつながる。大きな段ボールで囲われた「おうち」に、透明の青いビニールシートが登場すると、二歳児の子供たちは屋根のように被せ、中に入り始める。「水族館みたい」「海みたい」「サメが来るよ」「逃げるー」。物に誘われたイメージが言葉になり、友達と交換されて

いく中で、更にイメージが膨らんでいく。このように言葉が自然と生み出されるような環境の下で、子供は感じたことを表現するための道具として言葉を用い、それが他者と連鎖していくことで更に活動が展開していくのである。

活動の展開はやがて協同につながっていく。他者を意識するようになる三歳児は「○○ちゃんは□□だったんだよ」と、他者の状況や行為、思考を言葉にする。同じ物を作り、同じように身に着け、同じことをして一緒に楽しんでいる。変身ヒーローになりきった四歳児たちは、五歳児のショーごっこを真似て、「どの曲をどういう順番でかけようか」「この曲をやりたい」「あの怪物をやっつける対決をして見せたい」など相談し始める。五歳児のお店屋さんごっこもなれば、「時計の長い針が六になったらオープンにしようよ」「もう時間になったよ。オープンの表示にしようよ」「お客さんを誘いに行こう」などと話し合う。思考力の芽生えに伴い、活動が緻密になっていくにつれて、そこで用いられる言葉は、各自が思考を言語化し、更にそれを他者と共有して協同するための道具となっていく。

物との関わりが深まってきたり、子供